

平成28年度学校関係者評価シート(年度末評価)

平成 28 年 3 月 31 日

校番	068	学校名	広島県立祇園北高等学校	校長氏名	柞磨 昭孝	☑・定・通	☑・分
----	-----	-----	-------------	------	-------	-------	-----

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	A	・SWOT分析の結果と学校経営計画、更に各達成目標とが明確な関連をもつてつながっており、適切に設定されている。先行きが不透明で多様化・グローバル化する今後の時代を生きる生徒を想定し、主体的な学びを促す授業づくり、個に応じた指導と支援、高い志をもった生徒の進路指導などを組織的・系統的に推進する方向が示されており、適切である。今後、更なる創意工夫に努めていただきたい。
目標の達成状況の評価の適切さ	A	・目標達成に向けた指標が具体的に設定され、達成状況を目標値と実績値から分析し、更に評価とその理由を付すことにより達成状況を細かく具体的に捉えており、適切である。また、評価結果も適切である。 ・理数コースの指標が少しずつ改善している。評価項目は概ね適切に設定されているが、目標と評価指標に若干のズレがあると思われる項目は検討の余地がある。
目標達成に向けた取組の適切さ	A	・全体として、適切な目標設定と達成に向けた具体的な取組が進められ、着実に進んでいる様子がうかがえる。特に、生徒の主体的な学習活動を通して「思考力・判断力・表現力の育成」をテーマとして、公開研究授業を実施し、各教員の課題を明確にする組織的な取組がなされており、方向として適切である。
評価結果の分析の適切さ	B	・授業評価アンケートや業務改善モデル校アンケート、大学入試センター試験全国平均通過率、模試の偏差値、そしてオープンキャンパス参加者数が増加したことや第2学年の模試結果が下がったことの要因などが概ね具体的に分析されている。また、各学年の課題を明確にして組織的な取組がなされており、適切である。特に、国公立大学の合格数は評価できる。
今後の改善方策の適切さ	B	・学力向上の観点から各教員が授業力を分析し、課題を明確にし、その克服に向けて教科内の授業研究や全体での公開研究授業が行われている。このような授業研究会をシステム化していくべきと考える。授業力とは何かを明確にし、更なる取組を期待している。 ・分析結果から整理された課題を解決するための改善方策は、やや具体性に乏しい感がある。例えば、2学年の模試の結果が下がった要因を授業改善や家庭学習の充実と関連づけるなどして、改善方策を検討することも考えられる。各学年の通年比較などにより、更なる取組の改善を期待する。
総合評価	A	・全体として、適切な目標設定と取組が進められ、目標の実現に向けて着実に学校が前進している。国公立大合格数も以前より増加し、部活動は大会上位を目指して取組がなされており、今後も大いに期待できる。生徒の指導をさらに進めていただきたい。 ・理数コースの教育内容の工夫、主体的な学びの促進、部活動及び校内美化活動の充実など、北高が少しずつ前進している印象を受ける。特に、理数コースに関しては、生徒の自己評価が非常に高く、教育内容が充実し、高い教育効果をあげていることがわかる。 ・主体的な学びを促進させる取組を深化させること、生徒が活躍する機会を増やすための様々な対外的な活動への参加などの記述が学校経営計画の中に加わり、現状を乗り越えて更に高いところを目指そうとする気概がうかがえる。生徒の主体的な学びを目指して組織的に取り組んでいけば、より良い結果が生まれるものと確信している。